

福祉系

対人援助職養成の

現場から^④

西川 友理

ちゃんと生活出来ているから、大丈夫。

ある児童養護施設にC君という男の子がいました。どちらかというと“どんくさい”男の子で、年上や同世代の子どもだけでなく、年下の子どもからでさえからかわれやすい男の子でした。からかわれると余計むきになって、つかかかっていき、さらにはからかわれる、ということも時々ありました。C君の入所理由は父母の病気とこれに端を発した様々な

理由による生活苦でした。

ある夏休み、親御さん夫婦がC君の外泊のお迎えにいらっしゃいました。C君が出かける用意をしている間、誰もいない玄関で少し立ち話をしました。

「あの子、大丈夫でしょうか。成績もあんまりよくないし、気が小さいし、なんというか、全然器用じゃないし…」

ああ、心配されているんだ…確かに、C君は不器用だしね…と思っていた私の傍らから、職員のDさんがぬっと現われ、「お父さん、お母さん、大丈夫。あの子は大丈夫ですよ」

と力強く言いました。

「あのね、いつも茶碗やどんぶりを洗う時に、C君は僕らが教えたことないのに、糸尻のほうまでしっかり洗うんです」

「それから、洗濯物をとても丁寧にたたむんです。あれくらいの年齢の子って大体みんな適当にたたむのに、すごく丁寧なんです」

私はDさんがそんなところまで見ていたことにとっても驚きました。するとお母さんが

「ああ、確かに、それはそうかも…お家でも、私がゆっくりしているから、それを見てそんな感じになっちゃったのかもしれないですね…」

「そうですか！素晴らしい！！そういう生活が出来る奴あ、大丈夫です！お家で、きちんと親御さんがされてこられたからですね」

お母さんが涙ぐみました。

子どもに関わる先人と「生活」

「生活を、生活で、生活へ。」これは日本の幼児教育の父、倉橋惣三の有名な言葉です。

子どもたちの生活を、子どもたちが過ごすありのままの生活（さながらの生活）、実態のある生活の中で、充実したものにしていける。その営みこそ、幼児教育の真に大切な部分があると考えていました。子どもの生活、特に幼い子どもの生活は、もう全く「遊び」から出来ています。遊びが生活であり、生活が遊びであり、その中で周りの環境や大人や友

達と相互にやり取りすることを通じて、様々なことを学んでいきます。

「今日までの幼稚園保育法の研究は、子供の能力に属する方面や、その教え方の細かい点において多く行われ、肝心の幼稚園生活については、行われなかった観があります」。1933年の「日本幼稚園協会保育講習会における講演の筆記」にこの一文があります。（『幼稚園真諦』より）。倉橋が何よりも生活を重視していたことや、いたずらに特定の能力だけを伸ばそうとして普段の生活をおろそかにすることへ危機感を持っていたことがよくわかります。

日本の児童福祉の父と言われる石井十次が明治時代に創設した「岡山孤児院」（現在でいう児童養護施設のような機能を果たす施設の事）には、一時期1200人もの子供たちが収容されていました。この孤児院の職員について、石井は「自分が幸せな子ども時代を送ったと思っている女性」を雇ったという話を聞いたことがあります。石井は、保育者自身が充実した生活経験を持っていることに強く価値を置いていたようです。

倉橋といい、石井といい、日常生活を大切に考えてきたということがわかります。

丁寧で、きちんとした、幸せな暮らし。それはいかにもいいものだろうなあと思います。

が、その一方でそれはどんな暮らしなのか、と問われると、うーんと考え込んでしまいます。あまりにも抽象的で、「これが丁寧な、きちんとした、幸せな暮らし

しだ」という価値観は人によって違いすぎるのです。

「部屋をきれいにする」とは

どういうことか。

何年前にあるラジオで、毎日放送のアナウンサーの西靖さんが、

「うちの奥さん、どうしても、スマホの充電器のケーブルをクリップに差しておくことを忘れるんです。もう何度も何度も『これはここに差しておいてね』って言っているのに…」

と愚痴っているのを聞いたことがあります。これに対し、思想家の内田樹さんが、

「あのね、夫婦のお部屋のクリーンさ具合については、これはもう、どこまで行ってもすり合わないものです。そういうものです」

とおっしゃっていたことがありました。

心当たりしかない！！と、深く頷きました。

「お掃除」とは、何をどうすることか。

私の生まれ育った家は自営業で客商売をしており、お店はともかく、居住スペースの片付け掃除は、はっきり言って不十分でした。繁忙期は朝に店に立ったら昼食やトイレもままならず、夕食まで椅子に座れないという時期もあるほど

でした。

そんな生活において、仕事に関わること以外は、食事と睡眠がまず優先で、掃除は二の次、三の次という状態でした。

大人になって、生まれ育った家業とは違う仕事に就き、パートナーと暮らすようになったころ、きょうだい同士で掃除の話になったことがありました。

「掃除ってのは、汚れをきれいにするものじゃなくて、“汚れが汚れと分からないうちにきれいにするもの”なんだよね」

「そうそう、まさにそれ。そういう感覚、子どものころはあんまりなかったよねえ」

「お店を毎日掃除するみたいに、寝室も台所も掃除するもんなんだねえ」

「うんうん。頭ではわかっていたんだけどねえ」

と、お互いパートナーから、お部屋掃除について指摘されていることが判明しました。

毎日毎日、一見汚れていなくても掃除する環境で育った人と、ゴミが目についていても時間がなければ掃除は後回しにするような環境で育った人では、掃除の概念が違いすぎる、ということを感じました。

職員なんだから

“きれい”に掃除しないと

私がこの感覚に初めて気づいたのは、児童養護施設の職員をしていた頃です。

どうやら自分の掃除のあり方が一般的に不十分だ、という自覚はありながらも、どうしても感覚が身についていないということも感じていました。自分のクリーンさ加減のハードルがおそらくとても低いので、入所している子どもたちに求める清潔さもあまり高くありません。何より、私の心の根底に、

「私がちゃんと掃除出来る人間じゃないのに、子どもに“掃除しろ”っていうのは、嘘やんか…」

という気持ちがありました。何人かに相談したところ、

「そりゃ、職員なんだから、きれいに掃除しないとイケないでしょ」

「相手は子どもだよ。立場を考えたら、それは言わなきゃだめでしょ」という答えが返ってきました。

でも、「きれいに掃除する」とは、どういう状態を指すのでしょうか。どういう状態を「きれいになった」と感じるか、「ぴかぴかになった」と見るか、そこには明確な基準があるわけではありません。人それぞれ、千差万別です。

「経験として知っている」

ということが大切

そんなある日、とある先輩が、私に言ってくださいました。

「でも、掃除がされた空間、は見たことあるよね」

「それは、もちろんあります。お店は掃除していたし、小学校や中学校は掃除し

ていたし」

「うん。じゃあ、それでいいのよ。掃除をされた空間が日常生活の中で当たり前のようにあった、という経験として知っているということ大事なの。それがあれば、それをモデルにして、思い出せるでしょ」

「…そう、なんですかねえ…??」

「子どもも一緒に。掃除された空間が身の回りにある、という経験があれば、いまは下手糞でも、いつか『ああ、あんなふうな部屋があったな』と思い出せるようになるからね。そうすると、到達イメージがわかるから。ね、ぼちぼちでいいから」

子どものころ、お店は毎日掃除をしていたということ。飲食店のアルバイトは、しつこい程の拭き掃除がマニュアル化されていたこと。児童養護施設の職員をしていた時に子どもから、先輩から、同僚から教えていただいたこと。パートナーとの生活で、家の細かい部分の掃除でちょっとしたケンカを繰り返したこと。それらの経験が積み重なって、今の私の「クリーンさ」の感覚が出来ています。

おかげさまで今私はそれなりにお掃除が好きです。週末にリビングのフローリングに雑巾がけをすると、ストレス発散になります。出来れば毎日家中の雑巾がけをしたいくらいです。

生活感覚が鈍い人は、

子どもに関われないのか

なるほど、子どもとかかわる人にとって、炊事洗濯掃除といった家事に代表されるような生活に携わることは、単にスキルの問題ではなく、生活の実感、もっと言えば手触り、温度、湿度、匂い、重さ…とでもいうようなものが、いかに「豊かに、リアルに、経験としてあるのか」ということが大切だということになります。

そこで一つ疑問が生まれます。豊かでリアルな生活経験がないまま大人になった人は子育てはできないのでしょうか。つまり、不適切なかかわりしかできず、親や保育者になれないのでしょうか。そのような人たちは、子どもとかかわること自体、不適切なのでしょうか。

私は、お掃除や環境構成のセンスが鈍い、私のような者であったとしても、子どもの生活に関わってはいけないとは思いません。満足にお掃除が出来ない私が言っても、言い訳のように聞こえるかもしれませんが、実際、子どもに関わる人は、様々な人がいてよいのではないのでしょうか。むしろ、様々な人がいる方がいいのではないのでしょうか。

専門職は、

枠組みではなくエッセンス

専門職というのは、何でもかんでも完璧な支援をする人ではなく、大切ないくつかの専門性を備えている人だと考えています。つまり「ある一つの専門職と

いう枠にはまった人」のではなく「専門職として大切ないくつかのエッセンスを得ている人」ということなのではないかと思うのです。その職業として大切な、無くしてはいけないポイントさえ押さえておけば、あとは個々の特色があって当たり前です。それが援助のあり方の違いになり、その人らしい援助の個性につながると考えます。大切なことは、支援対象や支援の利用者が、多様な支援者に触れることが出来る環境があるということ、またその支援対象や支援の利用者それぞれが、多様な支援者の中から、自らに関わる人たちを選ぶことが出来るということだと思います。

というわけで、私はお掃除は下手ですが保育士をしていますし、片付けもうまく出来ませんが社会福祉士の有資格者であります。

考えてみれば、私は掃除整頓片付けのたぐいは本当に不得意でしたが、食べること、食に関することは大好きで、施設職員時代をはじめ、子どもとかかわる機会には、食にまつわる様々なかかわりをしました。

他の職員が採ろうとしない園庭のザクロを採って、子どもといっしょに食べました。柑橘類から作った柔らかいゼリーに牛乳をかけて混ぜると、ヨーグルトのような実験をして、不思議だねえ、おいしいねえと子どもたちと楽しみました。幼児と一緒に炒り卵を作った時には、「僕が作った！先生食べて！」と笑顔で私に「あーん」とスプーンを差し出してくれた男の子がいました。

そういえば、園庭の庭木の剪定や公用

車の洗車の際には、男性職員とともに子どもたちも見よう見まねで手伝っていました。S先生は子どもと一緒に施設の外の掃き掃除をしながら、「向こう三軒両隣」という言葉を子どもに教えてらっしゃいました。I先生は様々な工具を使って壊れたものを修理することが得意で、狭いベランダで黙々と作業している周りには、いつも男子が数名その姿を熱心に見つめていました。N先生はいつも静かに子どもの靴下やシャツの繕いなどの針仕事をされており、気づけばN先生の隣で大人顔負けの腕前で針仕事を手伝っている小学生、時には幼稚園児までもがいました。

職員は皆、出来ることや得意なことは違いましたが、多様な人がいて、多様なかかわり方をすることで、子どもを受け止めるネットのように重層的な生活支援になっていました。子どもたちは様々な大人に触れて、多様な生活経験を積み重ねていました。

福祉系専門職養成教育でも、

「生活を、生活で、生活へ」。

では、子どもとかかわる専門職、例えば保育者の養成教育においては、これらについて、どこまで養成校の中で行うことが出来るのでしょうか。

学生たちが養成校に入るまでに培ってきた生活経験は、個々バラバラです。家族の家事一切を担ってきた学生がいる一方、家庭科の時間以外で包丁を持っ

たことのない学生がいます。きちんと整理整頓ができる学生がいる一方、洗濯掃除を家でしたことがない学生がいます。これについて、何か働きかけることが必要ではないか、と感じます。その一方で、いや、そもそもそれは、養成校の教育という枠の中で行うには、あまりにも学生個々の人生や生活歴に深くかかわることではないか、と躊躇もします。専門職教育ごときが、どうのこうのと手出しや口出しをすべきところではないようにも思うのです。

専門職の養成教育の中でできることといえば「生活というものは大切なのだ」という感覚をいかに伝えるか、ということだと考えています。

学生は、掃除洗濯炊事などがうまく出来なくてもいいのです。その学生自身が「私はこの人生で生活の何を大切と教えられて生きてきたのか」つまり、生活の体験として、どんな学びをしてきたのか、それらを思い出し、振り返ることです。

保育士をはじめ、対人援助職の仕事の一番の道具は「自分の心と体」です。

変な癖がついていたら、直したいと思うかもしれませんが、一方で、その癖があるからこそ、味わいのある支援ができるからと、どんどんその癖を活かす支援をするかもしれません。その道具の癖を知り、矯正したり活かしたりと、どう付き合っていくのかを考えるためにも、自分の支援道具である心と体がたどってきた歴史、つまり「自分の生活の歴史」を振り返ることが、大切な学びになるのではないかと思います。

それがやがて支援者としてあらわれてくる支援の「個性」の裏付けになるのではないのでしょうか。

学生の生活に影響を与える

人的環境としての養成校教員

ある保育者養成校で、書類を入れる箱をいくつか、作るようになりました。幸い、紙製の書類入れがいくつかありました。ボロボロの使い古しですが、多分使えます。何の書類の箱かわかるようにしておく必要があったので、箱の側面に分類名を書かなきゃいけないな……と考えていると、F先生が

「包装紙か何か、ありませんかね」とおっしゃいました。倉庫を探すと、きれいな包装紙が少し残っていました。

F先生はその包装紙を受け取ると、秘密の道具箱とでもいうようなところから、かわいい千代紙や折り紙、両面テープやシール、マスキングテープを次々取り出し、それらを駆使して、瞬く間に書類ケースを次々と可愛く美しく、補修していきました。

F先生は、数か月前まで幼稚園の園長先生をなさっていた、新任の先生です。

「職業病です」と笑いながらおっしゃっていました。見やすく、使いやすく、可愛いデザインの書類ボックスがあつという間に10個ほど出来ました。

ほんの少しの手間で、書類入れをきれいな見栄えにする。私にはまったく気が回らない作業でした。もちろん、ただの書類入れなのですから、そんな飾りつけ等する必要はありません。必要はありませんが、保育者という、子どもが生活する環境を整える立場になる人たちを養成する場として、そのようなことに配慮された環境で生活するとしないとでは、何か「人が生活する環境」と向き合う姿勢の根幹に、大きく差ができるように感じるのです。

すごいなあ、と素直に感動する一方で、私も私に出来ることを頑張ろう、と勇気づけられます。

養成校教員にもまたそれぞれ、F先生のように現れる生活の営みへの姿勢があります。学生たちの学ぶ場は、学生たちが日々生活をする場でもあります。保育者が子どもたちにとっての大切な人的環境であるように、養成校教員もまた、学生たちの大切な人的環境であると自覚しつつ、この場に関わる人たちとともに場を作っていこうと思っています。